

令和元年6月13日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02307

研究課題名(和文) 柳川三味線の研究

研究課題名(英文) Research into the shamisen used in Kyoto Yanagawa-style jiuta (traditional songs with shamisen accompaniment).

研究代表者

長谷川 慎 (HASEGAWA, Makoto)

静岡大学・教育学部・准教授

研究者番号：00466971

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：京都・柳川流地歌三味線についての研究。京都における地歌箏曲の系統は伝統的に柳川流であり、一部の実演家が使用する三味線は細棹よりも細い棹・小型胴の三味線である「柳川三味線」が用いられる。本研究は、これまでに行われた柳川三味線について研究の再整理をし、楽器としてみた柳川三味線、他の地歌三味線との演奏表現の違いについての基礎研究を行い、京都上派における地歌伝承の現況調査、「水張り」による三味線の楽器調整(皮張り)の状況、楽譜・音源のアーカイブを行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

京都に伝承される古式の地歌三味線である細身の三味線「柳川三味線」について、これまで津田道子による柳川三味線に関する研究書『京都の響き 柳川三味線』の他は十分な研究は行われておらず、加えて津田のまとめた内容にも疑問を感じる点がある。本研究は柳川三味線に関して文献調査、実演家と楽器製作者への聞き取り調査、古楽器を中心とした現物調査、柳川三味線の音源収集を行なった。加えて伝承者に指導を受け、柳川三味線の演奏表現について特徴の把握をこころみだ。以上の研究から京都における地歌三味線として柳川三味線が一般的であった頃の楽器調整と演奏表現についての把握を行ない、今後の研究の手がかりとなる基礎研究を行なった。

研究成果の概要(英文)：Research into the shamisen used in Kyoto Yanagawa-style jiuta  
Traditionally, Yanagawa style has been the predominant form of jiuta (traditional songs with shamisen accompaniment) koto music played in Kyoto, with some performers using the “Yanagawa shamisen,” which has a very slender neck. This study: (i) reorganizes the research to date on the Yanagawa shamisen; conducts fundamental research into the differences in performance expression between (ii) the Yanagawa shamisen as an instrument and (iii) other jiuta shamisen; (iv) investigates the current state of jiuta programs in the Kyoto Kamiha school; (v) investigates the adjustment of the shamisen skin using “mizubari”; and (vi) archives music notation and recordings.

研究分野：地歌箏曲

キーワード：柳川三味線 水張り 古態の楽器 地歌 箏曲 京都 三味線 楽器調整

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

京都に伝承される地歌の芸系は、かつてその居住域から「上派」と「下派」と呼ばれた時代があった。今日その芸系の流れをくむ実演家の一部には古態の三味線である細棹よりも細い棹・小型胴の三味線である「柳川三味線」を今もなお用いている。柳川三味線は、使用する撥が全体的に細く薄く、撥先が狭いなど、現在一般的に用いられている地歌三味線と異なる部分が多く、現在一般的な三味線の分類である棹の太さによる「細棹」「中棹」「太棹」の3分類には該当しない。京都における柳川三味線を用いた地歌演奏は昭和初期までは一般的に行われていた。当時の京都の地歌箏曲界において影響力のあった「上派」の萩原正吟(1900-1977)が大正末期から昭和初期に九州三味線に持ち替えたことにより京都の芸系における柳川三味線による地歌演奏は減り、戦後には柳川三味線による地歌演奏は「下派」の一部の実演家のみとなっていた。昭和52(1977)年に萩原が没してから、やはり当時の京都の地歌箏曲界において影響力のあった京都當道会の津田道子(1924-2003・下派)が中心となり柳川三味線による地歌演奏が積極的に行われるようになり今日に至っている。一方、大正14(1923)年生まれの中澤は手ほどきから成人するまでの修業を柳川三味線で行っている。中澤は師である萩原正吟に戦後から入門・師事して以降、地歌を九州三味線で習い演奏していたが昭和48(1973)年に萩原の命を受け花街の祇園の地歌師匠を平成22(2010)年まで務めた。なお、祇園で演奏される地歌三味線は江戸時代から伝統的に柳川三味線である。本研究は演奏表現による部分について主に研究代表者が中澤眞佐師に指導を受けたことを拠り所としている。

研究代表者は、幼少期から地歌を習い、九州三味線を用いて専門的に学習してきている。また、平成23(2011)年より中澤に師事し、京都上派の地歌について柳川三味線を用いて指導を受けている。中澤は、戦前からの柳川三味線の演奏表現を知る現在唯一の演奏家・指導者である。一方で前述の津田が著した柳川三味線に関する研究書『京都の響き 柳川三味線』(1998年5月・社団法人京都當道会刊)には柳川三味線の演奏法や楽器の特徴が詳説されているが、中澤との演奏表現に相違点がみられることと柳川三味線の特徴のいくつかについて現物調査で得た特徴と異なる点があることに興味を持っていた。本研究はこれまでのこうした自身の経験から取り組みたい研究課題であった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、京都に伝わる地歌三味線「柳川三味線」の楽器、撥、駒、皮、皮張りについて主に明治期までの楽器を調査してその実態を明らかにすることであった。加えて、柳川三味線の演奏法、特に「上派」の芸系で演奏される地歌の現況を明らかにすることであった。

## 3. 研究の方法

本研究は、フィールドワーク、文献調査、実演家と楽器製作者への聞き取り調査、楽器の現物調査、音源収集による柳川三味線の音に関する調査、伝承者に指導を受け柳川三味線の演奏法の伝授を受けることにより研究を進めた。初年度と最終年度に柳川三味線、九州三味線、野川三味線の演奏表現の違いについて成果発表会としてレクチャーコンサートを開催し研究成果を発信した。

## 4. 研究成果

### (1)柳川三味線について

今日京都に伝承される柳川三味線は、三味線発生以来の古式の作りを伝える地歌三味線とされる。京都の地歌芸系「柳川流」にちなむとされ、京都のみに伝わった三味線の意から「京三味線」とも呼ばれ、分化する前の三味線の古態を今にとどめる。なお、同型の古態の三味線は全国に残っている。戦前までの京都における地歌三味線はこの楽器が一般的であり、今日地歌三味線とし

て広く用いられている「九州三味線」は「太(ふと)」と呼ばれている。

江戸期製作の古楽器には延棹、三ツ折の他六ツ折や九ツ折も見られまた蒔絵や彫金飾りなどの装飾が施された「お道具」的性格をもつものも多く残る。製作者は石村近江(江戸)、今村正房(京)、畑伝兵衛(京)等のほか、江戸の柏屋因幡大掾藤原儀久など日本各地の三味線製作者がある。これらの三味線の現物調査による楽器の比較から、今日の柳川三味線の祖型は江戸期の三味線の名工「石村近江」の型を参考にしているのではないかと考えている。

一方、大阪の地歌芸系は野川検校(1717没)祖とする野川流であり、当初は柳川三味線と同型を使用していたと考えられるが、19世紀初頭に津山検校が三味線、撥、駒を大型に改良した「野川流の地歌三味線」(以下「野川三味線」)が戦前まで続いた。皮も厚めで糸も太いものを使用していた。野川三味線ができたことによりその差別化から「柳川三味線」「京三味線」の呼称が生まれたのではないかと考えるが、これらの点は推論を出ず今後も研究を続ける。

以上のことから、柳川三味線は、細棹よりも細い棹・小型胴をもつ江戸時代の古態の三味線の様相を現在にとどめる三味線であり、主として以下の(2)①～⑤に示す特徴を持つ楽器である、と捉えて研究を進めた。

## (2)楽器の特徴

### 細棹よりも細い棹と小型胴

明治期以前の楽器では現行の地歌三味線(棹幅約2.7cm、胴板厚約2.0cm)に比べて、棹の太さ(棹の上端幅約2.0cm。細いものでは1.6cmも)、胴の大きさ今日の基準である長唄大から5厘大など様々なサイズがある。胴板厚は(0.9～1.1cm)で胴掛けは使用せず「手当たり」を貼る。

### 特徴的な皮張り(薄い猫皮を水張りで調整)

皮張りは薄い「四ツ乳」猫皮を両面「水張り」で張る(「胴に皮を張り楽器調整する」という意)。楽器店によっては「水張り」ではない張り方で行っている。かつては「八ツ乳」「六ツ乳」という子猫の皮や「犬皮」も使用された。「八ツ乳」は江戸時代から最良とされていたが今日は作られていない。残存する古楽器では表「八ツ乳」裏「犬皮」の組み合わせも見られる。「八ツ乳」は便箋並みの非常に薄い皮であった。現在祇園の地歌師匠を務める梅辻理恵の東京藝術大学修士論文「地歌『柳川流』の三味線について～京都における柳川流の現状を中心として～」(1991東京藝術大学)には昭和時代頃までは楽器店や職人によって様々な組み合わせがあったことが指摘されている。なお、研究期間終了後に皮張りが可能な「八ツ乳」が見つかり、義太夫(文楽)三味線や柳川三味線の「水張り」を手がける京都・今井三絃店(明治38年創業)で楽器調整を行なった。「四ツ乳」を張った楽器に比べて、鳴りにくい第二弦がよく響くだけでなく全体的に鳴りが良くサワリも豊かであり、これが「八ツ乳」が最良とされた理由の一つではないかと考えている。今後はそれぞれの倍音特性についても測定を行いたいと考えている。

### 四分程度の黒水牛製の裏側が割り貫かれた軽い駒

今日柳川三味線用として一般的に販売されている駒は裏の割りの大きい黒水牛材で、高さは四分(1.2cm)前後。重さは2.0～3.0gを超えるものまでとばらつきがある。かつては鼈甲材、白水牛も用いられた。質量は最も軽いのが鼈甲、ついで黒水牛、白水牛の順であり、製作が古い時代のものには2.0g程度の軽い駒がみられる。現在は鼈甲材、白水牛材の入手は特別注文となる。梅辻論文には高さについてもやや高めの四分五厘もあったことが記述されている(前掲梅辻、P.14)が楽器店への聞き取りでも同様の回答があった。また、駒の位置について、中澤眞佐師は音緒から「指2本半」の位置にかけて微調整とするが、津田は梅辻に対し「音緒から指4本分くらいの位置で曲や日によってわずかに上下させる」と述べている。

### 極薄の象牙製撥

撥はヘラ状の極薄の象牙製。楽琵琶・平家琵琶に似る。今日一般的な撥（写真参照）は鶴岡検校（?～1895）によって全体が「しなる」よう改良されたもの。「練り撥」と呼ばれる、撥をしならせ「ムックリとした音」（丸い柔らかい音）を出す。撥を当てる（「弾く」の意）位置は胴の際（キワ）や胴から外れたあたりを弾く。「練り撥」は撥先でご飯粒を練り上げるような動作でほとんど撥の動きを上下させないで弾くとされているが、実際には撥全体のしなりを利用して演奏する。但し、撥の上下の動きは最小に止めるように感じる。弾き方に関し津田の述べている点と中澤眞佐師の教えには差があり、これが「上派（中澤）」と「下派（津田）」の差によるものなのか、駒の位置同様、今となってはどちらが正しいと断定することはできず、むしろ盲人によって伝承されてきた音楽ゆへの多様性があるということかもしれない。

最も軽い糸（弦）をかける

弦の一番軽い設定である第1弦=11 匁、第2弦=10 匁、第3弦=8 匁をかける（「弦を張る」の意）。

### (3)古楽器調査からみた柳川三味線

現行の柳川三味線は、現行の多様な三味線のなかでは、江戸時代初期の古楽器にもっとも近い。京都の神田治光が1597（慶長2）年に製作した「淀」（現在の所在不明）、京都から江戸に移住した二代目石村近江が製作した17世紀初期の「鳴神」（八世芳村伊十郎所蔵）、江戸の四代目石村近江が製作した17世紀後半頃の「野路」（七世杵屋佐吉所蔵）などの古楽器は、棹が細く、胴も華奢で小型である。糸巻の角度やサワリ部分にも特徴がある。年代と種目を特定できないが、今回調査した楽器にも古態を残すものがあつた（「興」という銘の三味線には、サワリ谷がなく、糸巻が斜めに棹に挿入されている。棹の上端は2.1cm）。楽器の形態は時代により変遷し、その分類名も時代により異なる。たとえば、『日本社会事彙』下巻（明治34）には、京阪の三味線の特徴と明治初期の二、三十年における三味線の変遷に関する記述があり、当時の分類の「細棹」よりも「長唄の三絃」の棹が細いと書かれている。現行の長唄三味線は、現在の分類では「細棹」であり、現行の柳川三味線よりも棹が太い。三味線の変遷には解明できていない状況が多いと言えるが、変遷の解明につながる柳川三味線の存在は貴重である。

### (4)京阪紳の邦楽器店の現況

邦楽器組合連合会に加盟している小売業者は大阪22店、京都2店のみで、非加盟4店を加えて調査の結果、皮の張替を自店でしているのは7店で、内、水張り可能店は2店だが、1店は病氣休業中で、もう1店は「津軽」のみ受注という現状である。

皮の国内調達には保健所からの引渡しがなく不可能で輸入のみ。一時期、海外の製造者が内乱状態で、絶望的であったが、現在は、張替に耐える程度の原皮が入手可能になった。しかし、皮の加工業者は2～3業者のみで、全員が今後不安を抱えている。

「4.研究成果」(3)は野川美穂子が、同(4)は久保田敏子が、それ以外の全体は長谷川慎が執筆を担当した。





## 5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計10件)

1. 長谷川慎「地歌箏曲における古態の楽器について」「柳川三味線について」、第2回古態の楽器による地歌の会、2019
  2. 久保田敏子「地歌箏曲の作品《落梅》《言葉質》《浪花十二月》《子の日の遊び》《俊寛千鳥》《竹生島》《富士太鼓》について」、第2回古態の楽器による地歌の会、2019
  3. 長谷川慎「柳川三味線による地歌『《竹生島》《富士太鼓》演奏』、第2回古態の楽器による地歌の会、2019
  4. 久保田敏子「三味線のサワリについて」地歌箏曲研究会、2019
  5. 長谷川慎「柳川三味線演奏《影法師》」『第12回柳川三味線による地唄の会』、やなみ会、2018
  6. 長谷川慎「柳川三味線演奏《鳥辺山》」『第11回柳川三味線による地唄の会』、やなみ会、2017
  7. 野川美穂子「地歌箏曲の作品《黒髪》《江戸土産》《七草》《早舟》《町づくし》《松竹梅》について」、第1回古態の楽器による地歌の会、2017
  8. 久保田敏子「津山検校について」、第1回古態の楽器による地歌の会、2017
  9. 長谷川慎「地歌箏曲における古態の楽器について」、第1回古態の楽器による地歌の会、2017
  10. 長谷川慎「柳川三味線演奏《ゆき》」『第10回柳川三味線による地唄の会』、やなみ会、2016
- 〔図書〕(計1件)
1. 久保田敏子・野川美穂子『地歌箏曲事典』、2019年10月発売予定、予定総頁数700頁〔その他〕

## 演奏会プログラム解説

- 1.野川美穂子「第2回 古態の楽器による地歌の会 柳川三味線の音色を中心に」, 地歌箏曲研究会、2019
- 2.野川美穂子「第12回 やなみ会 柳川三味線による地唄の会」, やなみ会、2018
- 3.野川美穂子「第11回 やなみ会 柳川三味線による地唄の会」, やなみ会、2017
- 4.野川美穂子「第1回 古態の楽器による地歌の会《黒髪》《江戸土産》《七草》《早舟》《町づくし》《松竹梅》」, 地歌箏曲研究会、2017

## 成果発表会配布パンフレット解説

- 1.長谷川慎「地歌箏曲における古態の楽器について」「柳川三味線について」, 第2回古態の楽器による地歌の会、2019
- 2.長谷川慎「水張りについて」「柳川三味線について」, 第1回古態の楽器による地歌の会、2017
- 3.久保田敏子「津山検校について」, 第1回古態の楽器による地歌の会、2017

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：久保田 敏子

ローマ字氏名：(KUBOTA,satoko)

所属研究機関名：京都市立芸術大学

部局名：日本伝統音楽研究センター

職名：名誉教授

研究者番号(8桁)：10090200

(2)研究分担者氏名：野川 美穂子

ローマ字氏名：(NOGAWA,mihoko)

所属研究機関名：東京藝術大学

部局名：音楽学部

職名：講師

研究者番号(8桁)：50218294

### (2)研究協力者(五十音順)

研究協力者氏名：芦垣 美穂

ローマ字氏名：(ASHIGAKI,miho)

研究協力者氏名：浅野 陸夫

ローマ字氏名：(ASANO,takao)

研究協力者氏名：今井 伸治

ローマ字氏名：(IMAI,shinji)

研究協力者氏名：梅辻 理恵

ローマ字氏名：(UMETSUJI,rie)

研究協力者氏名：岡村 慎太郎

ローマ字氏名：(OKAMURA,shintaro)

研究協力者氏名：菊央 雄司

ローマ字氏名：(KIKUOH,yuji)

研究協力者氏名：菊聖 公一

ローマ字氏名：(KIKUSEI,koichi)

研究協力者氏名：菊珠 三奈子

ローマ字氏名：(KIKUTAMA,minako)

研究協力者氏名：小池 典子

ローマ字氏名：(KOIKE,noriko)

研究協力者氏名：戸波 有香子

ローマ字氏名：(TONAMI,yukako)

研究協力者氏名：飛山 百合子

ローマ字氏名：(TOBIYAMA,yuriko)

研究協力者氏名：中澤 眞佐

ローマ字氏名：(NAKAZAWA,masa)

研究協力者氏名：村澤 丈児

ローマ字氏名：(MURASAWA,jojji)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。